水谷先生最終講義

談話分析上の諸問題

[条件・接続表現の多用、談話の展開、「わたし」の潜在と遍在]

水谷信子教授

今、あんまり落ち着いた研究、研究らしい研究をしていませんので、ここ数年やったことをお話ししようと思っていて、ときどき、もっと昔のことを思い出したりしますけども、特別講義の意味というのは、とりとめのないことになると思うんですけども、「特別」というのは、「特別ひどい講義」というふうに思って、聞いてくだされればいいと思います。

それで、皆さんにお渡ししたハンドアウトは、かなり量が多いですけども、その中には、一部人間文化のほうのドクターのほうでお話ししたことも、ちょっと重なっております。ここに、こういう表みたいなものをやってみたんですけども、これは実は言文の学生がもっと精密な表を作って統計を取ったりして、そんなにわたしのほうは及ばないんですけども、ちょっと手仕事でいくつか集めた表です。ですから、こういうものは、きょうは、ただ簡単に結論だけ申し上げていきますので、詳しいことは、もし後でご質問があったらおっしゃってください。

それじゃあ、始めさせていただきますが、そこの談話分析上の諸問題という題は、何を話してもたいていこれに当たるだろうという逃げ道的なものですけれども、その中で、だいたいお話ししたいと思ったのは、三つありまして、一つが「条件表現・接続表現の多用」ですね。その次が、「談話の展開」の一つの特徴、最後に「『わたし』の潜在と遍在」という、そういうアイディアなんです。

まず、初めに条件表現の多用ということなんですけども、日本語教育のほうでは、こういう基本的な条件表現の研究というのがだいぶ盛んでして、例えば、「雨が降れば」と「雨が降ったら」と「雨が降ると」とか、そういう「えば・たら・と」というのはどう違うかというような論文がたくさん出てます。細かい研究が進んでいるんですけども、わたしはそれを見ていますと、学習者に「えば・たら・と」がどう伝わるかというようなことよりも、むしろ外国人学習者がそういう条件表現をあまり使わない、これは、さっき長友先生がおっしゃってくださった、非用というのに通じるんですけども、習っ

て覚えるんですけども自分からは使わないで、もっと使いやすい表現に逃げるといいますか、そちらのほうで間に合わせるという傾向がある。それには、いろんな非用の内容、非用になるものには待遇表現とかいろいろなものがあるんですけども、その一つとして、条件表現というのをずっと考えて参りました。例えばですね、わたしが教えてきた学生は、おもに英語の学生で、中国語を母語にする人も何人かおりますが、例えば、「何時に来たらよろしいでしょうか」とか、そういうふうに言ってほしいんですね。「あした何時にうかがったらよろしいでしょうか」と言ってほしいときに、「わたしは何時に来るべきですか」とか、「わたしは何時に来るはずですか」なんていうのが多いわけですね。それから、名刺を受け取って、名前の読み方が難しい、わかりにくい、そうすると、わたしたちは、「お名前はどうお読みしたらよろしいでしょう」というふうに聞くんですけども、「名前の読み方は何ですか」と、こういうふう、ま、今の日本の若い人もそういうこと言うかもしれませんけども、ときどき、「下のお名前はなんですか」なんて言われていますけども、そういうような、「どうお読みしたらよろしいでしょうか」、そういうのが少ないんです。それから、「薬を飲んだほうがいい」という「たほう」、これ、出ていますが、「飲むほうがいい」はもう少し幼稚になりますが、「薬を飲んだらどうですか」というような「飲んだらどうですか」というようなことをたくさんこちらが教えましても、「薬をのむほうがいい」というような、こういうような表現になりやすい。そのことを考えまして、これは５年前ですか、１９９０年に津田塾でシンポジウムがありましたときに、「接続表現と談話の展開」という発表をいたしました。ここには副題がありまして、「条件表現を中心に」という副題がありまして、条件表現を主にして、広い意味の接続としてそれを入れて、ほかに「から」や「けど」などもちょっと入れて、そういう発表を９０年にいたしました。そのときの調査の結果がそこに出ております。調査したのは、日本語で条件表現を使う場合には英語では使わないことが多いであろうという、こういう予想をたてまして、それで、翻訳のほうを集めました。そこにありますのは、日本語から英語へどういうふうに訳出されているかということです。細かい数は重要ではありませんけど、論説体の硬い書き言葉の文章と会話体とだいたい同じような数をそろえました。それで、上のほうに日本語で「行けば」というのが英語になったらifになったり、if´ になったりというふうに分類しました。

そのif´というのはifに似たようなものということで、その下にちょっと、こういうas long asとか、imperative（命令形）＋and とか、そういうふうな似たものをいっしょにしたんですけど、それは、きょうは細かいことですから、あんまり詳しくお話しいたしませんが、上からifとif´とwhenとwhen´と、それからparticipleですね、分詞ですね、そういうものがありまして、その下に idiomがありまして、その他、それから何にも訳してない、というふうに分けたんですね。大事なのは、下の三つのidom、other 、noneというその三つなんですけども、つまり日本語の中には、「えば・たら・と・なら・ても」とかそういうのがあっても、英語のほうではこういうような英語の接続表現といいますか、こういうものがない、条件表現がないという例ですね。下の三つをあわせてみますと、下のほうに書いてありますが、論説体のほうは足しますと、なんか計算間違ってるかもしれませんね、一つぐらいは。それで論説体がこうで、会話体がこうでというふうに、つまり訳出されないものを足してみたんです。そうしますと、論説体のほうは一番右のほうをご覧になりますと、だいたい３１％は英語になった場合に条件表現がないということです。それから会話文の場合にはもっと多くなりまして、日本語の場合には「こうしたら」とかそういうのが多いものですから、会話文は特に多いんですね。それが英語になりますと、ほかの表現になって条件が出ない。で、これが５８．５％というふうにでました。それを平均しますと、５１％。そうしますと、単純にいいますと、半分ぐらいは日本語のほうに条件表現があっても英語になるとそれがでない、ということになります。非常に簡単にいいますとそうですね。その後に細かいデータですけれども、分類の例として、例えばどういうふうにした場合に英語のほうには条件表現がでないか、というのがいくつかありまして、例えば、例の１を見ますと、これは天声人語の訳だと思いますが、「屋久杉といえば千年以上を経た杉である」というふうに「といえば」というのがありますが、そういうのはない、と。それから次は例の２ですね。「６９年の育英会発足から延べで数えると」と「数えると」というのはないわけです。無視するわけですね。それから(b) のほうはもう少し文の形を変えまして、日本語のほうでは条件表現があるのをその部分を主語のようにして SVOにしてしまう。こういう例の３ですね。「ひとはある場所に立つと、だれしも、それ以前には予想もしなかった感情や思いを味わう」というのがありまして、それを“A trip”としまして、これがど

こか行くことというのが主語になりまして、“evokes”これが動詞になって、“unexpected sentiments and thoughts”ですか、そういうような訳になる。こういうのが割合に多いということです。これはやや書き言葉的ですけども、例の４は会話文なんですけども、「おみこしをかつぎまわったら、夢中になれていいねえ」というような非常にくだけた文なんですけども、これにしましても、“Working up a sweatand running around”というふうにこれが主語になってまして、SVOの形になっている。ですから必ずしも書き言葉には限らないということがでました。その例は同じようですけども、その次のゴルバチョフのほうも同じような例です。

ここまでを１９９０年に話しましたときに、これはそのとき日本女子大だったと思いますが、奥津敬一郎さんという方が、これは日本語から英語に訳したんだから逆のほうもないとだめですよ、なんて文句がでまして、それでそのあとやろうと思いましたがなかなか時間がなくて、９４年に、これはきっかけは５月か６月でしたが、人間文化のほうでお話をする機会がありましたのであわててやりました。そうしまして、今度は英語から日本語へ訳したらどうなるか、というのをやったんですけども、この場合には英語のほうは単語で数えますので日本語のほうは字で数えましたから割合として２．３字で１語であろうと、これはいくつか数えてそういう割合をだしまして、本来ならば１６７４１語ほしいんですけども、間に合わなかったんで、８８００で、まあ、お茶をにごした、これもまだ途中です。ですけれどもそういうふうにしてやってみました。その表は今度は英語から日本語になってるんですね。本当は向きをかえたほうがよかったんですけども。英語にifとあるのが、日本語で「えば」になったか、「たら」になったか、というようにして数えました。下のほうの結果を見ていただきますと、論説体のほうでは訳出されないものですね、日本語のほうへ。ええと、あ、これは逆になります。日本語のほうはやたらに条件表現が多いですから、条件表現が原文にないのに、英文にないのに日本語のほうでは入れてしまったわけです。それが下の星印で、ごく簡単に言いますと、論説体で６８％、会話体で６９％が原文にない、原文でほかの表現であるのに日本語では条件表現になっている。こういう数がでました。そこにあるのは例ですけれども、これはドナルド・キーンさんの講演だったと思います、例の６ですね。例えば、こういうことなんですね。“In my own case”というふうにphraseになってますと、「私自身のことを

いいますと」というふうに「ますと」と「と」が入る。「こんなに長く住んでいても」“even after all this time”というのも、「住んでいても」というふうなのがどんどん出てくるわけです。これは訳した人のくせもありますけども、それにしても出てきますね。それから(b)のほうですけども、これはさっきの「ひとはある場所に立つと」というのの逆になりますけども、その同じような形ですから一語の英語名詞を条件表現を含む従文節にするということですね。ちょっとミスプリがありまして、this knowlege というのがgの前のdが抜けております。失礼しました。this knowledge というのが主語になりまして、converted them from angry patrons to members of the teamというふうになりますのは「何か事故があってお客さんが怒っていたのがいい説明があったので協力的になった」という話なんです。で、英語のほうはこういう英文なんですけども、それを日本語に訳しますと「こうして事情がわかってみると、今まで大いに怒っていた客も」というふうにこういう訳が形が変わってまいります。こういうようなのが一環で、あとこの分類を今続けておりますけども、まだ結果がはっきりと出ておりません。で、ここまでお話ししましたのは、非常に日本語では「こうしたらこうだ」「こうしたらいい」とかいうような条件表現が多いというお話です。

その条件表現だけでなくて、ほかの接続も非常に日本語の方は多いですね。これは前から考えていたことで前にも本に書いたこともあるんですけれども、よく日本語の「から」と「ので」はどう違うかというような分析が行われますけれども、実際に細かいことは別にして、わたしたちが「から」や「ので」を使うときに使わない外国人が多いということです。で、これは英語のほうと引き比べて考えてみますと、例えば「から」というのがありまして、それが一応はbecause というふうに初級で教えます。ほかに、since とかasとかいろんなのがありますけども。because と「から」が非常に違うことは、because のほうは「雨が降るから道が濡れる」というふうに非常に論理的な帰結に使われるのが主です。それに対しまして、日本語のほうはそういう形もありますけれども、前件といいますね、前の部分が「赤ん坊が起きるから」というようなこういう「から」を使って、その後に「静かにしてください」というような働きかけが来るわけです。つまり陳述と陳述だけじゃなくて、条件を言った後に相手に働きかけるという形が非常に多いんですね。それが英語の学生には、英語の母語の人には、非常に頭に入りにくいらしいんです。

ここにはありませんが、前に教えておりましたときに、前に作りました教科書の中に、主人が散歩に行く、で、奥さんが「ついでにでいいからリンゴを買ってきてください」というところがあるんですね。それはなんでもないと思ったんですね。そうしましたら学生が文句を言いまして、リンゴを買う理由は食べたいということであるか、リンゴがなくなったとかそういうんなら「から」でわかる。だけど、ついでにでいいということとリンゴを買ってくることはどういう関係があるか、というようなことを、大変理屈っぽい学生でおもしろいんですけども、いじめられたことがありまして、それからずっと当時はまだうまい答えが出ませんで苦労しまして、要するに感情的なつながりなんですね。その感情的なつながりだけでは承知しませんので、ちょっとパラフレーズしまして、リンゴを買ってきてほしいと思う、だけども散歩へ行く途中の行きにリンゴを買って持って歩いたら重いであろう、で、帰りに買えば負担が少ないであろう、わたしはそこまであなたの負担を考えているのであるから、その部分をよく察して言うことを聞いてくれと、こういう意味であると言いましたら納得しました。そういうようなこじつけと言いますか、悪く言えばこじつけですけれども、学生を納得させようという活動をかなり長い間やってまいりまして、そちらのほうは専門でありますけども、そういうふうなことがありまして、この「から」というのはおもしろいなあと思いました。「から」もいろいろありますけれども、「何々でいいから」なんていうのもたくさんありますね。「一目でいいから会いたい」とか「2、3日でいいから貸して」とかそういうのはたくさんあるんですが、そういうのは非用になるといいますか、英語の人たちに使いにくい。これははっきりしたことは言えませんが、中国語の人もある程度そうではないかと思います。切ってしまうんですね。例えば、「赤ん坊が起きます。起きると困ります。静かにしてください」というふうに切るとか、二つを「から」でつなげるということがないわけです。その簡単な例を言いますと、「から・ので」を使った依頼表現が習得しにくいと書いてありますのは、わたしたちが本当に初級のころでもよく言います「すぐ失礼しますからどうぞおかまいなく」それはもうわたしが教科書を作りましたときには、なるべく早く入れようと思って第七課ぐらいにもうちゃんと一生懸命入れたんですね。ところがそれをせっかく習っても、「すぐ失礼します。どうぞおかまいなく」と切ってしまう学生が多い。その次もそうです。「ちょっと用事がありますのでそろそろ失

礼します」というのも「ちょっと用事があります」と言って切ってしまうのが多いということです。これは依頼ですね。依頼だけでなくて勧誘についても同じです。普通にわたしたちが言いますのは、「今度の土曜日にうちでちょっとしたパーティーをやりますから来てください」とか「来ませんか」と言いますね。それを切って分けてしまって、「今度の土曜日にうちでパーティーをやります。来てくださいませんか」となる。これを英語では自然の場合にはどうであるかというようなことを何人かのネイティヴに聞きまして、少しはバリエイションもありますが、大体次のような文になる。というのは切れるわけです。「から」に当たるものは英語では使わないということです。あるいは下のように二つの文を一緒にしてしまうんですね。「今度の土曜日にうちでやるパーティーに来てくださいませんか」というふうに長くなる。これは頭のいい学生に多いですね。こういう長い文を作りたいという意欲的な学生は、こういう長い文になってしまうんです。日本語のように「から・ので」でつなぐということが少ない、ということがわたしの経験です。これが今後、何か数量的に出すことができたらいいなと思っていますが、わたしができなければ、どなたかがやってくだされば、なおいいと思います。

それから「けど」というのも、「けど」は去年の、チン・ビレイさんという台湾の学生がこれについて修論を書きましたけども、その「書きましたけども」の「けども」というのは、これは別に逆説ではないんですけども、もっと非常に話題提示の「けど」というのがありまして、「あ、さっきの話ですけど」というような「けど」はなかなか前置き的な用法という分類が成り立つんですけども、これが定着しにくいですね。例えば、人にものを頼む時に、わたし、前にアメリカ人の学生が多かったのですけども、いかに遠慮がちに人にものを頼むか、というようなことを話題の展開の形として教えたんですけども、非常に簡単なのは「あの、先生」と言いますと、「はい」と先生が答えて、「お忙しいところ、誠に申し訳ありませんが」と言うと、先生のほうはたいてい人がいいから、「いいえ、いいえ」とか言うんですね。そうしますと、その次に「昨日書いた作文のことなんですけど」とそこへ出しますと、「あ、そうですか」という先生もいるし、「あ、見てあげましょうか」なんて自分のほうから言ってくれる先生もいるんですね。そうすると、「見てください」というメインになる依頼表現はしなくてもいい。「あ、すみません。お願いします」というのもあるんですね。そういうのを一生懸命

教えましても、なかなかそれが身につきませんで、ある時イエール大学の非常によくできる学生が来まして、同じような話題ですけども、つかつかつかとここまで来まして、あ、これも一つの問題ですね。この人と人との距離の問題もあるのですけれども、ものすごくこちらまで来まして、こっちがこう下がるんですけども来まして、非常によくできる学生でして、明晰なる頭を持ってまして、「先生、お忙しいところ誠に恐れ入りますが、わたしが夕べ書いたこの作文をちょっと直していただけませんか」とバーッとやったんですね。それで、まあ素晴らしいと、そんなことこちらが外国語で言えと言われたら言えやしない、と思ったんですね。ですけども、それは効果的には逆でして、こっちは（身をひく様子をして見せて）こうなっちゃいますので、そういうことを教えるのは大変です。よほど、この学生の頭の中に、そういう、つまり英語の中で丁寧な表現は長い文がよろしい、という観念が非常に固くしみ込んでいるので、じゃ、逆にやってみようと思いまして、「わたしが英語やるから、あなた先生になってください」と言って、ある時頼みまして、“Professor Jones”とか言いますと、学生は嬉しくなって“Yes”とか言うんですね。で、“I´m sorry to trouble when you are busy.”とか言いますと、黙っているんです。「お忙しいところすみません」、黙っているんです。それから“It´sabout my composition I wrote last night .”まだ黙っているんです。それで普通だったらドキドキしてやめちゃうところなんですけど、しょうがないので、“Could you takea look at it?”と言いますと、“Oh yes,certainly.”と言って持って行ってくれるんです。そんなにあっさりcertainly と言うんなら、はじめからいい顔してくれればいいんですけども。まあ、そのへんは談話の展開の仕方の違いがあります。その中の一つの「けど」ということがあるんですけど、その「けど」はなかなか定着しないんではないかと思います。そういうことを考えまして、他にもたくさんの接続表現をこれから分析していけば、もっとおもしろいと思うんですが、非常に簡単に性急に結論を出してしまいますと、ちょっと考えましたことは、これは９０年のシンポジウムの時のハンドアウトですけども、直線型とジグザグ型というのがあるのではないかと思いました。これは条件表現をよく使うというのは、条件の提示を受けて結果を示すという意味で、ある意味ではジグザグと折れ曲がっている。それに対して、ＡはＢであるとか、ＡがＢをしたという展開は、いわば一直線の感じであるから、こういうふう

に下の方に線を引きますと、条件句がないとサッサッサッと流れていくのですけれど、条件句が多いとこういうふうにちょっといっては折れ曲がって、ちょっといっては折れ曲がって、というような展開をするのではないかというようなお話をしました。

これと同じような研究は他にもだいぶありまして、最近の「日本語教育」という雑誌の７２号に、西原鈴子さんという国研の方が書かれたものがありまして、いろんな部分の他の角度からの分析というのもあるんですけど、日本語の文はまわりくどいという印象を与える。まわりくどい原因としては、接続表現が多すぎるんだ、というようなことが書いてあります。西原先生の研究のほうは、日本人がまず日本語を英語になおす、その英語が下手だからネイティヴの人が、英米人がそれを英語らしい英語になおす、はじめのほうの直訳となおしたほうを比べていって、それから前の日本語よりだんだん接続表現が減っていくという研究をしているんですね。ですから、本当の英語らしい英語ではあんまり接続表現を使わないのである、というようなそういう研究もあります。他に、外国人の研究もあるんですけども、それはちょっとここでは細かいことは触れません。三つのテーマをお話ししますので、そのぐらいまでが接続、特に条件表現の多用ということです。

その次にまいりまして、どんな展開をするか、一番はどういう動詞を使うかということなんですが、実はそこに原文と書いてありますけども、これはもっと長い作文でして、わたしが日本研究センターというところにおりました時に、非常によくできるアメリカ人の女性が書いた長い文なんです、作文なんです。それは、友達と一緒におばさんの家へ行ったら、その一緒に行った男性の友達が途中で酔っ払っちゃって困って、始末に困って、しょうがないから、置いて帰るわけにもいかないで家へ連れてきたらそこで寝ちゃったとか、そういう話なんですね。その一部分を、実はこの言語文化の人たちに分析してもらいまして、自分が書けばどう書くかというようなことを書いてもらいました。さっき長友先生がおっしゃいましたように本当にわたしは講義らしい講義をしませんで、みんなに何かしてもらったりしておりまして、ここでお返しをしようと思っております。で、みんなに書いてもらったんですね。全部で４７集まったんですけども。ですからそれを後で分けました。その原文を、もとの文を読みますと、「その日、友達のおばさんの家に招待され、２時ごろ友達と一緒におじゃました。私たちは２時間ほどおじゃます

るつもりでいたが、お酒のせいでそのパーティーはなかなか終わらない。6時間がたったら、やっと帰れた。」これは、原文のとおりです。かなりよく書ける人です。この中のですね、「私たちは2時間ほどおじゃまするつもりでいた」というところを日本言語文化の学生ですからネイティヴなんですが、その人たちはどういうふうに書くか、書いたかということを分けて分類してみたんですね。そうしますと、原文の「おじゃまする」というのをそのまま使った人が3人です。これは同じようですね。それからその次がおもしろいんですね。「おいとまする」になるんです。もうおじゃましてるんじゃなくて、帰ることを考えてるわけですね。「おいとまする」がこのくらいです。4人おりますね。それから多いのが、12名いるのが、「帰る」。家へ帰ってしまうということ、そこを出て帰る。「帰る」と同じ意味で、「失礼する」。「失礼する」が非常に多いので、言文の学生、非常に言葉遣いが丁寧だと思いますけども、「失礼する」が圧倒的に多いわけです。それで、その他っていうのは、違いますけども、それでも「2時間ほどのつもりだった」「2時間以上いるつもりはなかった」というふうになってまして、これがなぜおもしろいかっていいますと、もとのアメリカ人の書いたのは、2時間ほどそこにいるつもりだったということで後の予測ができないんですね。2時間ほどいるつもりであった、いるということを言ってるんです。その後長くなったのか、途中で帰っちゃったのか、あんまり、予測できないような形だと思います。それに対して、日本人の書いたのは、2時間ほどでおいとまするつもりだったというふうに先に帰るということを頭において、だけども帰れなかったんだということが予測できるような展開というか、そういう文を作ってるんですね。ですから読んだ時に、「2時間ほどおじゃまするつもりでいた」よりは、「2時間ほどで帰るつもりでいた」というほうが次の「お酒のせいでそのパーティーはなかなか終わらない」というふうにさっとつながるようにわたしは思います。ですからこのへんですと、どの程度もとの文が違和感があるかということですね。非常によくできる外国人の文を聞いて、あるいは読んで、日本人が違和感を感じるのはどこであるかといった時に、一つ一つの文とかあるいは文の一部分ですね、句ですね、そのへんには問題はないんですけども、全体として流れが違うんだと思います。次にこっちが期待しているように流れてくれないところがありまして、こうなりますね。これは読んでるだからいいんですけども、長い話を聞いていますと、ここまで

聞いて多分こっちへ行くだろうと思って日本人が聞いていると、こっちへ行ってしまうんですね。あわててこちらから軌道修正をするということで、非常に聞いていて疲れます。だから、疲れるのはなぜかということを考えますと、展開の流れが違うんだと思いますね。わたしたちはその次に帰るんだけれど帰れないというような言い方が、非常に身に染みて使いやすいんじゃないかと思います。これが一つの実験でした。

それから、今度は、それは去年の５月に集めたんですけども、そのあときょうのお話のために同じ作文の後半の部分をちょっとやってみますと、その男の友達が彼女の家に来て酔っ払って寝てしまって、やっとの思いで起こして駅まで連れてって、自分の家へ帰したという話なんですけども、その最後のとこなんですが、「友達は大丈夫だったが、お酒を飲み過ぎたばかりに私に迷惑をかけてしまった」というのが原文です。この「ばかりに」というようなかなり気取った表現ですけども、これは習ったばっかりの表現をこの作者は一所懸命使ったんですね。こういう原因があるのでひどい目にあったというような意味の「ばかりに」です。さて、それを言文の学生さんに書いてもらいますと、だいぶ分かれまして、１番です。初めのほうは、何とか帰れたが、その友人は帰れたがさんざん人に迷惑をかけた。で、３人が人に迷惑をかけたとか周囲に迷惑をかけたというふうになってます。その次が、はっきりともう、わたしに迷惑をかけた、これは前の原文とよく似ていますね。わたしに迷惑をかけたというのがかなりいるんですね。これは、彼はわたしに迷惑をかけたなんて言い方は、あまりしないかなという予想もあったんですが、意外にこれはあるわけなんですね。結局、その友だちのことを頭に置いて書きますと、その人を中心にして考えるもんですから、わたしに迷惑をかけたっていうような、やや硬いって言いますか、あんまりなじまない表現になるんですね。ですから、これは主語の問題とも関係があります。それから、あと同じような、今度は「わたし」のほうが中心になりまして、「彼は無事に帰った」、「散々迷惑をかけられた」とか、「わたしはずいぶん迷惑をかけられた」、「わたしは迷惑を被った」、このへんは、全部、「わたしは」「わたしは」「わたしは」「酷い目にあった」、同じようですね。みんな、「わたしは迷惑を被った」っていうふうになっています。それで、このへんも、どちらのほうが自然であるかというようなことは、ちょっと今はっきりとは簡単に結論が出せないんですけれども、ただ、自分のことを常に中

心にして考えてみると、やはり、わたしは迷惑したというようなのが多いんじゃないかと思います。自然に感じるんじゃないでしょうか。むしろ上のほうのはやや原文に引きずられたかもしれません。これは、まだ、あと数人集めてないのがありますので、全部ではありません。こういうようなことを、これから少し考えていこうと思っております。さっき長友先生が立場志向ということを言ってくださいましたけども、その作文を書いた時に、日本人がどの程度自分の立場をずっとどういうふうにして貫くか、自分の立場を中心に書くんだけれども、その時に他の人についてはどういうふうに入れるか、というようなことはやってみたいなと、思っております。

それと、その次の３というのは、ちょっと、違うんですけれども、これも今やりたいと思っていることですので、お話ししておきます。これは、もとの本がちょっと見つかりませんが、先生方特に平田先生などにたくさんやっていただいて、科研費の研究をしました時に、日本語の談話の展開と、日英比較というような、そういう、科研費の研究を数年前に致しまして、その中の一つわかったことは、日本語のニュースですね、テレビのニュースですけども、日本語のニュースというのは、非常に、ＮＨＫのニュースですから、これは平田先生のご責任かもしれませんが、とにかく、ＮＨＫのニュースだけとったんですけども、きのう何とかで何とかで何とかで何とかした何々の事件ではというふうに、条件って言いますか、この場面を示すような言葉が大変長いんです。きのうどこどこで、何々の関係で、何々が理由で、っていうようなことがたくさんありまして、誰が何したっていうのは、かなり後になって来るんですね。で、それが出てきまして、これを、平田先生にコンピューターで分析していただいたので、主語が出てくる、主語もいろんなものをまた分けましたけど、その前に、いくつぐらいの文節が来るかってなことをやりまして、そうしますと、日本語のニュースの場合には、誰々首相は、ってなのが出て来る、まあ、「が」も入れたんですけども、前に６．５文節かかる、ということです。それだけやんないと、出て来ないですね、平均して。だから、状況をずっと考えていって、誰が何したまでかなり待たされることになるんですね。それに対して、今度は多重放送のほうですから、英訳のニュースで日本語に合わせて英訳してありますから、そんなにいい英語でないかもしれませんけども、英訳のニュースのほうを同時にとりまして、これを数えると、主語の前が１．２２５ということが出ました。今度は全然内

容の違う英文のニュースをとりまして、それを数えますと、０．５７、まあ、詳しいことはまた後でということになりますが、非常に、つまり、すぐ主語がばっと出るということです、簡単に言いますと。誰が何をした、っていうのが、すぐ出るんですね。そういう文に慣れている外国人が日本語のニュースを聞いたら、ずいぶんいらいらするだろうと、誰が、というのがなかなか出て来ないんですから、これは大変なことだなあと、同情したわけです。それからもう一つ、またいろんなそれに付随していくつかの資料を集めたんですけども、もう一つはですね、主語が出てきた、で、その主語が、主な動詞ですね、例えば、「首相は被災地を見舞った」というような場合に、「見舞った」という言葉が動詞ですね、その間に「被災地を」とか、一つ文節が入る。そういうようなのがあるんですけども、英語のほうはもちろん文の構造が違いますから動詞がすぐ来ることが多いんですけども、英訳のニュースで見ますと、主語があって、その後すぐにメインの動詞が来るのが英訳ニュースで６０％でした。英文ニュースですと、実に８０％も、誰々が何したっていうのが、すぐ出るんですね。誰々がしばらくの間何したとか、そういうことはないわけで、すぐ出る。これはもう、科研費の時にひととおり纏めたことなんですけども、わたくしは今度は今やってますのは、書いた文ですね、普通の文の中で、ニュースのような音声言語でなくて、書いたものの中ではどうかなというのは、ほんとに始めたばかりで、いろいろな研究書しか今手元にないんですけど、言語学関係のもので、そのＰｒｅｆａｃｅの中の文を見ますと、恥ずかしいくらい少しですね、まだ１１文、集めたんですけども、１１文集めましたが、全部何もないです、最初に主語が出るんです。この本は何とかである、っていうのが出るんです。ですから、「この」は主語の中に入れて数えたんですけども、とにかく、その主語の前に０であるのが、１０ですね。何か、「最近は」とか、そういうような他の文が、フレーズがあるのが、たった１つでした。ですから、いかに、英語の文では、誰が何したっていうのが先に出るかということですね。それがありまして、ですから、我々が例えばもし英語を使うとしたら、とにかくいろんなことを言わないで、誰が何した、と言えば、少し、その点だけは英語がうまく聞こえるんじゃないかということで、これは前にも聞いたことがありますけども、こうやって比べてみますと、非常にはっきり出たので、驚いたわけです。

それから最後になりますが、ここまではわりと穏やかな話なんですけども、

Ⅲのほうはわりに勝手なことを申しますので。ちょっとこれは、なんでしょうかね、なぜかって言いますと、この１２月１０日にお話をしたりしまして、その時に、昔の若い頃に研究したっていいますか、やったことなんか思い出しますと、それがまた印象が戻ってきまして、それと今やっていることとは何か関係があるかなというようなことを考えるわけです。それで、かなり英文学のほうにも飛びまして、こういうのを英語でwildというのだそうです。wildというのは野蛮という意味ではなくて、とりとめもない、突拍子もないという意味なんですけど、大変とんでもないことを申し上げるかもしれません。

それで、まずですね、今まで「わたし」ということを言わないでもわかるのが日本語である、というようなことが言われてきまして、それに対して、これは教科書のせいもありますけれども、外国人の学習者が「わたしは、わたしは」というようなことを言い過ぎるんですね。それがだんだん問題になりまして、最近の教科書はそんなにひどくなくなっていると思いますけれども、少し前の教科書を見ますと、「わたしは先生です」「あなたは学生です」なんていうのがだいぶあるんですね。「わたしは先生です」なんていうのは、ちょっと恥ずかしくて言えないんですけれども、自己紹介をやるときに、まず、「わたしはジョンソンです」「わたしはチンです」というのから始まるのが多いんですね。でも、それもわたしたちから見ますと、ここにいて自己紹介を始めれば、「わたしは」について話すことはすでに場面ができてるんですね。なぜ言わなきゃなんないかということですね。「ここにいる人はチンじゃなくて、わたしはチンなんだ」と、それならわかるんですけども、そういうことでないのに、「は」が入るような、まだまだそういう教材があります。このへんはよく調べてありませんけれども、小学校の国語の教育なんかにも、そういう、かなり論理的に話しましょう、というような教育が行き過ぎているところがあるんじゃないかなと、これは想像です。

それで、今まで日本語教育の中で、学生のいろいろな疑問とか不満とか批判ですね、批判というのはひどい話で、他人の国の言葉を批判するなんていうのは非常に勝手な話ですが、これはやはり日本の国力が低かった頃に、今はあんまり批判しないんじゃないでしょうか。やはり金持ちになると批判されないわけで、始めました４０年くらい前の頃は、特にアメリカ人なんていうのは、自分の言語は立派なもんだと、こっちは思えないんですけど思って

おりますから、それで、日本人の話はどうも論理的でないとか fragmentary であるとか、つまり断片的できちんと構築されていない、と悪口を言うんですね。こういうようなこととだいぶ４０年間戦ってまいりましたから。それが最初の「主語の提示と暗示」というところで、こういうようなことを言って、これを武器にしてやってきたということをちょっとご紹介したいんですけども、つまり、外国人の非常に素朴な質問なんですね。「なぜ主語がなくても日本語では誤解しないでコミュニケーションしてるんですか、絶対誤解ないですか、本当にないですか」なんていうのがいるんですね。「ないことはないですけども、まあ、まず９０％、９５％はない」というと、非常に不満な顔をするんですね。そういうと、わたくしも後で思い出したんですけども、なんとまあ英語の人たちは心が狭いのか、外国語をあまりやってこない若い人が多いですから、狭いですね。少しラテン語でもやりゃいいのに、と思ったりしまして、わたし、別にラテン語ちゃんとやったわけじゃなくてすぐ挫折したんですけども、何でしたか、cogito ergo sum というのを習いまして、「我思うゆえに我あり」というのは、我、日本語では我というけど、むこうのcogitoというのは「自分が考える」でしたか、ergo「それで」 sum「自分が存在する」で、ちゃんと語尾変化してますから、主語を言わないですね。偉いもんだと思って、わたくし、ラテン語偉いと思ったんですけれども、まだ学生の頃で、その後ちっともやってませんが、そういうような考えがありまして、但し、それが日本語だから「わたし」がなくても済むんだと言ってしまっては学生が納得しません。どういう場合に主語がなくてわかるのかというようなことをいくつか教えるわけですね。そこに出てきたようなのは、今の言文の人にとってはもう常識以上の、常識以下ですか、のものですけども、でもわたしが教え始めた頃には、これでも発見したつもりでおりました。例えば、感情形容詞ですね。感情形容詞は本来自分が主語である。だから「うれしい」というのが普通で、「わたしはうれしい」とは言わないんである。ところが、これは、英語の教室なんかでは、たぶん、こういうHe is happy.She is happy.というような文を読んで「彼は幸福である」「彼はうれしい」「彼女はうれしい」なんて訳しているかもしれませんね。そういうような翻訳はまた別ですけど、実際に自然な日本語としては、ないんです。それで、左のほうにあります「あの人はうれしいです」というのは、学生が間違えてこういうふうに言ったんですけども、「あの人はうれしいです」と

は言わない、とか、そのへんはいいんですけども、「あいつは楽しいやつだ」っていうのがありまして、これ、わたしが教えた時に学生が全部誤解しました。どういう人ですかって、わたしが聞きますと、「いやあ、多分新婚でしょう。」なんて余計な解釈しまして、彼は幸せなんだというふうに説明するんですね。そんなことないんで、この人は話が上手で、わたしがその人と一緒にいると、うれしい、楽しいんだと言いました。非常にびっくりしてました。そういうようなこと、欲求表現もそうですし、それから心理動詞ですね。「～と思う」というようなのも、英語ではI think I will go.というのが普通でしょうけども、日本語でしたら「行くつもりです」とか「行こうと思う」とかそうなるのであって、「行くと思います」と言うと、誰か他の人が行くようになってしまうんですね。その中で一つこんな例がありまして、これはやはり日本研究センターにいた時ですけども、教育ママが二人で話をしている会話の場面がありまして、「お宅の息子さん勉強してますか」と一人が言うと、「いいえ、ちっとも勉強しないんで困ります。」っていう会話なんですね。で、これ危ないなって思って、わたし、これわかるかって言いましたら、学生が「こんなやさしいの」っていう顔したんです。念ために「誰が困るんだ」と聞いたんですね。そしたら、「ああ、それはもちろん、その勉強しない息子が困るんだ」と平然と答えたんです。いやあ、そうじゃないんで、その人が、息子が勉強しないからこの親が困るんだ、と言いましたが、その時は、本当に学生が頑として、「どこにそんなことが書いてあるか」と言われまして、恥をかきまして、わたし、うまい答えができなかったことを覚えております。その後で何か言ったのかもしれませんが、とにかく困るとか、そういうのは何も言わない時には自分が困るんである、っていうことで、学生は次の日納得させたんですけども、それでもなかなか納得しませんで、「ああ、でもまあ、日本では受験地獄ですから、勉強しないと彼は本当に困るんじゃないですか、だからこれは彼が困るんじゃないですか」というふうになかなか諦めない学生がおりました。後で考えてみますと、「そんなことされちゃ困ります」っていうようなそういう動詞がいくつかありますね。そういう動詞、心理的な動詞の場合には自分が中心であるから言わなくてよろしい。受け身なんかの場合には、だいたい言わなければ自分である。待遇表現なんかではもう、自分が恩恵を受けたのが普通であるから、こういうふうな話をしてきました。してきましたけども、その後、もう少し考えますと、

あの立場志向と視点というようなことがありまして、視点というような研究もいくつか出ているんですが、何が違うかっていうと、よく似ていますけれども、誰々の視点からものを言うというような、ものを見る、表現する方向っていいますか、そこのカメラを置いた部分のようなものが、レンズの置き方のようなものが視点なんですね。それに対しまして、わたしのほうが心理的に考えましたのは、日本人がいつも立場志向というのは自分の立場を離れることができない、つまり、「彼がわたしに日本語を教えた」というようなことを言わないで、「教えていただいた」とか「教えやがった」とか、とにかく自分の立場から、自分の利害関係かあるいは自分の心情的なものからやる。そういういわば心理的な方から立場志向というのを考えたんですけども、そんなことで、皆さんの中でも修論でそういうことを書いてくれた人もあります。

ところがしばらくしまして、最近、さっき言いましたように１２月１０日に若い時の話をしまして、ここに女高師に３年いまして、東大の英文へ行ったんですけども、英文を、英文学を少し、勉強したというほどではないんですけども、その時に小説の話を聞きまして、その英語の小説の視点というのがあります。それを最近になって思い出したんですね。ずっと４０年忘れていたわけです。それでもうわたしの手元には英文学の本なんかどっか行ってしまってないもんですから、いろんな辞書の類で調べた程度ですけれども。その当時わたしが傾倒していたのは、ヘンリー・ジェームズという作家なんですね。これはアメリカへ留学した時に、特に読んだんですけれども、ヘンリー・ジェームズという人はアメリカ人で、最初はアメリカ人ですけれども、やはりアメリカの低俗、あのまあ、軽薄っていいますか、低俗軽薄な文化に飽きたらなくて、ヨーロッパの方が文化が高いんであると、こう信じまして、そういう文化の違いについて、いろいろな小説を書いた人です。最後にはイギリスに帰化したと思います。その人があの英語の小説の書き方っていうような本なんか出しているんですけれども、その人の言い出したのが、point of view っていう、立場じゃない、視点ですね、視点というのを打ち出した。どういう意味があるかって言いますと、それまでのいろいろな小説というのは、例えば日本でも、いろいろな小説がありますけども、戯作者的な「これからちょっとおもしろい話をして、お客様のご機嫌を取り結びましょう」という、そういうような立場のものもありますね。それから自分が、神のよう

になって、「ここで彼はこういうことをしている、一方こちらの百キロ離れたこちらでは彼女がこうしておるのである」というふうに、こう非常に高みから見物してものを描写している。そういうのが多かったんだと思います。それに対してヘンリー・ジェームズの言いましたのは、ある一人の人物を決めまして、その人物の目から彼女が何をしたか、あるいは彼がどうしたかということをみて、全体の様子を描き出すという方法を考えたわけですね。ヘンリー・ジェームズの場合には、中心になる視点をすえる人物は一人ではなくて、何人かの人を添えて、わりに多角的になっているわけです。その時に、日本の私小説とは違うのかなと、非常に単純なことを考えましたが、もちろん、それは、文学の先生もいらして、ここで恥ずかしいことも言えませんけれども、かなり違うものだろうと思います。日本の私小説のほうは、もっと狭い文壇的な制約もありますし、自分の限られた環境の中だけのことを書いたのですから、同じ自分の目から見たにしても違うとは思いますけれども、とにかく、４０年も前ですけど、ヘンリー・ジェームズのことを読みまして、大変おもしろいと思った覚えがあるんです。ヘンリー・ジェームズのお兄さんがウィリアム・ジェームズという心理学者でして、この心理学者はstream of consciousness という意識の流れということばを作り出した人です。この人間の意識は、多様な要素を持ちながら流れていくんである、というようなことを言い出した人で、このウィリアム・ジェームズのstream of consciousness が、非常に影響力を持ちまして、その後のいろいろな作家に影響しましたが、一番主なのは、ジェームズ・ジョイスの意識の流れを中心にした小説ですね。最初は「若き芸術家の肖像」というようなのを書きましたが、その後で、「ユリシーズ」のような大きなものを書いた。で、こういうことが知られているんですけども、それよりもっと前に、ヘンリー・ジェームズのほうは、もっと前に視点ということを言い出しました。そんなことを、実は、本当に今年になって思い出すってのは、おかしい話ですけれど、ただ、こういう英文学の話は、わたしが４０年以上前に聞いた話で、今研究がどういうふうになっているか全然知りませんので、お門違いのことを申しますけれども、それを思い出しまして、もう一度、視点のことを考えてみようかな、小説を書く場合の視点というのは、おもしろいなと思い出しました。で、話は違いますけど、わたし、去年ちょっと病気をしまして、おととしでしたか、胆石の手術をしまして、その頃に、ガンの手術をして死んだ有名なタレント

がいましたね。あの人が自分は入院する時に「鬼平」を持っていく、「鬼平犯科帳」を持っていくと言ったんですね。で、わたしも真似をして、「鬼平犯科帳」を買いまして、読んだんですね。大変おもしろいんですけども、やはり、その時何が気になったかというと、どこかにわたしの頭の底に、一つの視点を決めた書き方が好きになってしまったところがありまして、せっかく、平蔵の心が視点になっているのに、急にとんでもない悪人のところへ、心が移っちゃうんですね。で、どうもおもしろいんだけど、その点では不満なんですね。ま、大衆小説は一般にそうであると言われておりますが、それで、視点のことを思い出しまして、今度は、日本の小説で見たら、どういうふうになっているのかなと、大変簡単な飛躍をしました。そこで見ますと、一番好きな小説で、「坊っちゃん」をここに出しました。こんなのは、皆さんが非常に親しんでらっしゃると思うので、読み上げたりしませんけど、実は、ここのところに、「俺」ということばは、全然出てこないんですね。「俺」の立場から書いていますから、「俺」はいらないんですね。これは、３ページぐらいいきまして、やっと「俺」が出てくるんです。「俺」がどういうふうに出てくるかっていいますと、「親父は俺のことがきらいだった」というような言い方ですね。「俺」はなにをしたというようなのはなかなか出てきません。ようやく「俺は、人に好かれるような人間ではない」というのが出てきまして、その「俺」というのは、他の人と違ってというような対照をして「俺」ですね。だから、「俺」は何をしたというのがないんですね。ああ、実にみごとなものだと思いまして、念のために、この「親譲りの」から５、６行ですね、ここのところをいくつか翻訳がありますけど、佐々木さんという人の翻訳ですけど、この翻訳で見ますと、この中に“Ｉ”「わたし」ってのが１３回出てきますから、ずいぶん違うなと思いますけれども、要するに自分のことを自分の目からを書きますから、「わたし」とか「俺」とかいうことばは、いらないわけです。それに比べまして、こちらに引きましたのが、左のほうが「雪国」ですね。これは長友先生が、「は」と「が」の研究のためによくお使いになる材料なので、真似して引っぱったんですが、他意はございませんが、もう少し新しいものと思って出しますと、これはですね、もちろん島村は「わたし」ではないのですから、書く視点が違いますけれども、見てみますと、誰かが何かして、島村はこうしたというのが非常に多いんです。で、ある意味では、分析的に島村はこうした、島村はこうした

というのがどんどん出てきまして、英訳しやすいだろうななんて思うんですけども。こちらのほうはちょっとおきまして、「坊っちゃん」のほうを見ますと、自分のことを書いているんですから「わたし」って言う必要ないんですね。それがおもしろいなと思うんです。これは誰のことばでしたか、遊女、たぶん高雄かなんかの恋文、誰にあてたんでしたか、「忘れねばこそ思い出さず候」っていうのがあったんだそうです。ちゃんと調べる暇がありませんでしたけれども。それが非常に気に入っておりまして、つまり、わたしということを「忘れねばこそ」、全然書かないんじゃないかなっていうのが「わたしの遍在」なんですね。潜在して隠れているというよりは、話っていうのは特に話しことばの場合には、いつも「わたし」のこと書いてますから言う必要がない、で、そういうようなことを思い出しまして、「遍在と潜在」というちょっとかっこいい、「せんざい」なんていうとちょっと石鹸みたいですけれども、いろんな小説なんかを見て、いつになったら「俺」とか「わたし」が出てくるかを見たら、おもしろいんじゃないかと思っております。

それでですね、最後に「雪国」の下の方に、ちょっと横に書いてありますのは、わたしのメモ的に書いたものでして、「対話的なわたし」と「共話的なわたし」というのを書いたんですけども、これはほんとはまた説明すると、ご存じの方には退屈になりますけれども、やはり、あいづちの多い話し方というのは、どこまでが自分の話で、どこまでが二人一緒の話かわからないようなところがありまして、一人が何か言うと、すぐ重なって、途中まで言うと「きのうはねえ」と言うと、一人が「地震大きかったわねえ」と言うと、何か一つの文を二人で作っているような、そういう話し方はいわば共話ではないか、これはわたくしの造語でした。で、この共話という造語を作ったんですが、それに対して、一人の人が自分の意見をざーっと言って、その間他の人は黙ってじっと聞いていて、やおら「わたしは実はこう思う」というのは、対話的なものではないか。それは、いろんなバリエイションがありますけれども、別に、英語が対話で日本語が共話というのではありませんが、日本語のスタイルの中に共話的な話し方と対話的な話し方っていうのがあると思うんですけれども、日本語の場合には、ただ、共話が多いと思います。共話が非常に気楽なんですね。友だちや仲間といろんなことをわかりあってもらえるから、あんまり説明しないで「あれね」「うん」「うまくいった」「あ、そう」。非常にfragmentary な会話をやっておりまして、そういうふ

うに共話的な会話をしておりますのは、仲間的な意識を感じさせまして、楽しいんじゃないかと思います。楽しいというか、心安らぐ。で、それが、急に他の人のグループと一緒にあるいはよその人と話す時には、「えー、わたしはー」というふうにやらないといけない。というのは、非常な緊張を要するんだと思いますね。これは日本社会の中から国際的な話をする場合にもそうですし、うちの中から会社へ行ってからの話でも、会社の中でも同じ課の人と他の課の人とでは違う。いつも共話的な、こたつに入ってぬくぬくしているような話と、外に出て靴をちゃんと履いて、ネクタイを締めたような話と、我々は行き来しているんだと思いますが、わたしたち共話的な話が根は好きなんじゃないかということを思っています。で、それにつきましてですね、ハンドアウトを作る暇がなかったんですが、その下にちょっと書いておりますのは、「は」と「が」の説明、対立というのはよくありますけれども、むしろ、これからは「は」や「が」でなくて、ゼロですね、「わたし、お腹すいた」という言い方が話しことばに非常に多いんですね。「わたし、お腹すいた、これ、食べる」「明日、来る」「明日、来ない」、そういうようなゼロ型の、助詞ゼロ型の話し方っていうのは研究したらおもしろいんじゃないかなと、これはちょっと脇道です。

さっきの「わたし」の「共話的なわたし」っていうことを考えておりましたら、大変おもしろい論文がありまして、この方どういう方かわかりませんけれども、『言語』の去年の６月号ですね、「短歌の言語学」という特集の中で岡田愛子という方が英文学・比較文学という専門なんだそうですけれども、「外国人が見た短歌」という話を書いておられます。これ読んでまして非常におもしろかったのは、ほんの一部分ご紹介しますと、かなり古い訳なんですけれども、この人いろんな日本文学の英訳を集めて研究しているんですね、１８６６年といいますから、すいぶん昔ですけれども、その人、ディケンズという人が日本の和歌を訳しているんだそうです。その和歌を一つとりあげますと「人はいさこころもしらずふるさとは花ぞむかしの香ににおいける」というわたしたちもよく知ってる歌なんですけれども、その歌を訳したんです。その訳した時の訳はちゃんと韻律をふんでバラード風に訳したと書いてありますけれども、その「久々に生まれ故郷に帰った詩人が、幼友達の冷淡な視線にあって呆然として、花の香りをみるとそちらだけ昔の故郷の姿を認めた」というふうに訳してあるというんですね。つまり、その、これ

は非常におもしろいと思います。詳しいことはスペースがないので書いてないんですけれども、日本の詩を西洋の詩のように訳すと非常に問題になることはこういうことである、大変いい説明がありまして、「古今集においては『人はいさ』というのは歌の話ですけれども、人の変わりやすさと自然は変わらないというような対照という技巧は、古今集においては非常によく用いられている。その場合に、人が変わってしまうという認識は、変わってしまった人の不実、情がないという冷たさを恨むというようなものではなくて、自分をも含めた人間一切の無常の認識であり、従って、自然の不変に関する認識も、別に自然は誠実であるといってほめるというよりはむしろ季節感のようなものを楽しんでいるのである」というふうに書いてあるんですね。ですから、この場合、日本の古今集の今の歌のような場合には、人と自然とは実は対照はするんだけれど、別にこれは対立するものではなくて、混然としている。ところが、同じことを西洋語で翻訳する、表現すると、これは不実と忠誠、つまり心暖かいものと冷たいものというふうに、対照になってしまう、というようなことが書いてありまして、これは言語が背景にしている、文化的伝統の差なのである、というような結論が出てまして、これは非常におもしろい話だと思うんです。ここで考えましたのは、つまり、わたくしたちが、「わたし」っていうのはいつも「わたし」がここにありまして、「わたし」は遍在してまして、忘れる暇がないほどいつも、「わたし」なんですけども、その「わたし」というのは他者と必ずしも対立しているものではなくて、むしろ世の中全体の一部であるような混然とした「わたし」であるのではないか、ということがあります。それで、それに関連して思いますのは、よく、「は」と「が」でなくて、「は」でなくてですね、「も」っていうのがありまして、この「も」っていうのが、外国人によくわからないんですね。「まあ、わたしも６０になったから」なんて言いますと、「他の誰が６０になったんですか」なんて。そりゃまあ、日本人は大勢いるから６０も大勢いるでしょうけど、「誰のこと考えたんですか」っていうような質問があるんですね。その場合にはわたしは、「わたしも大勢いる人の一人」というような認識で、そこまで分析しませんけども、「わたしもこの歳になって」とか、そういうような言い方が多いんですね。それからこれは日本研究センターの学生と武者小路の「だるま」っていう話か何か読んだんですね。「人間もああなっちゃおしまいだね」っていうのがあったんですね。そしたら学生が

「どうして『も』ですか、どうして人間はああなっちゃおしまいだって言わないんですか。動物はあんなにならないじゃないですか。人間の他のものは何ですか」というふうに問い詰められましてね。「人間もああなっちゃおしまい」、人間と同じように堕落するものは他にもあるのかなあ、その時わたくしはうまく答えられませんでしたけれども、人間はというのではなくて、人間もああなっちゃおしまいだ、いろんな存在の中で人間も、その一つなんだ、というような、非常に自然の中に一体化して溶け込んでいるような「わたし」っていうのが遍在しているんではないかなあと、思うんです。それが、共話的な話をするときに大変気楽に出てくるんですけれども、いつもそれだけやってるわけにいかないので、やはり知らない人と話をする時には、非常に対話的な身構えをしなきゃいけないので、それがどの程度疲れるかっていうことは、これからの問題じゃないかと思います。今まで、まあそんな話を皆様に、荒唐無稽なことを申しましたが、聞いていただきまして、この資料のほうは、細かい資料は手元にありまして、興味がある方にはお見せいたしますけれども、こういうことよりは、全体に今の話で、これからもわたしも何かまた勉強していこうと思っているんだ、ってことがわかっていただければいいし、何かみなさんの研究テーマのヒントになれば大変幸せだと思います。きょうは本当にこんなお天気のいいところを春に背いてこんな話を聞いていただきまして、ありがとうございました。

（９５．２．２３）